

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティ

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

ホームページで「講演動画」公開中!

ニッケ教育研究所 ビデオギャラリー

教師の皆さまへ 模擬授業形式の特別講演

「教師の日常改革」 授業が変われば
学びが変わる!
子どもが変わる!

〈講師〉関西学院初等部 教諭 森川 正樹 先生

スマホから、ご視聴いただけます

「授業で勝負する」ためのヒントは、
子どもたちとの何気ないやりとりの中にある——
気づきを実践につなげられるお話です。ぜひ、ご覧ください!

動画の
ご視聴は
こちらから



一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけますか？
子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で
是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

「不易流行」という言葉があります。いつまでも変化しない本質的なものを忘れずに、同時に新しく変化
していく要素も取り入れるという意味です。例えば、「部屋をきれいにする」という本質的な目的を果たす
ために、その手段は「ほうき・はたき」から「掃除機」に変わり、今では「お掃除ロボット」が普及してきまし
た。子どもたちの「生き抜く力」を育てることは、いつの時代においても、教育の本質的な目的であると思
います。IT技術が進化し、AIが日常生活で活用される現代において、子どもたちの「生き抜く力」をどの
ような方法で育むかは、私たち大人に与えられた宿題だと感じています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央

Instagram QRコード

FOLLOW US!

Facebook QRコード

特集

私がつくる子どもの笑顔 第11回

子どもたちの『生き抜く力』を育てるために ～ 地域一体となった学校づくり ～

誌上対談

教師とは、人が成長する瞬間に立ち会える仕事。
夢があって、ロマンがあって、こんな尊い仕事はない。

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真は治部坂高原 (長野県下伊那郡阿智村) です

教師とは、人が成長する瞬間に立ち会える仕事。 夢があって、ロマンがあって、こんなに尊い仕事はない。

目の前の子どもたちとどう向き合えばいいのか。授業力を高めるためには何をすればいいのか。今後の教育に何が必要なのか。現場実践の第一人者として定評があり、多数の著書がある関西学院初等部の森川正樹教諭と、ニッケ教育研究所の勝本孝夫顧問に誌上対談をしていただきました。（聞き手は、ニッケ教育研究所 橋本立志）



《関西学院初等部教諭》
もりかわ まさき
森川 正樹 氏

——子どもが自ら学ぶ具体例を著書で紹介されています。そこで大切にしていることは何でしょうか。

森川先生 子どもが自ら学ぶということは、やっぱり授業が楽しいことだと思います。考えたいと思うような学習設定をつくるのが大切で、それが教師の仕事。常に「授業」に焦点をあてたいと思います。

勝本顧問 子どもが前のめりになる授業にするためには、ひとりひとりの持ち味を知ることも大切ですね。

森川先生 子どもたちと向き合う中で授業の方向性も変わりますし、意欲を前に出せる子が多い時とそうじゃない時ではアプローチも変わってきます。それがわかってくると、教師の仕事が楽しくなるんです。僕は、子どもの幸せを願う教師にとって、**教師の日常である授業で幸せを得ることが大切**だと思っています。日々の授業を輝かせて面白いと思えることが、子どもの幸せにつながるからです。2年生を担任していますが、算数やってチャイムが鳴りますよね。そうしたら、「えー、もう終わり？」って。嬉しいじゃないですか。「教師やって良かった」と心から思います。

——先生どうでのコミュニケーションも大切ですね。

森川先生 管理職やリーダーの先生方からの声かけがとても大切です。知り合いの管理職の先生が若いかけだし先生に、「授業どうだった？」「子どもたちどうだった？」「スミーどうだった？」って授業の話から入っていると素敵な姿だなと。

勝本顧問 先生方だけでなく、事務員さん、給食調理員さん、管理作業員さんも、授業の話をする前のめりになるんです。**自分たちの仕事を通して、子どもの幸せにつながるイメージ**が湧くんですよ。

森川先生 授業を介して仕事ができている学校は、子どもたちにとって幸せだと思います。その観点からも、**授業を研究する体制**はとても大事です。もちろん、自ら学びに出向くなど授業を良くしたいと思うことも必要です。「授業ちょっと見せて」

「いつでも見に来て」という会話が生まれる文化も、授業にベクトルが向いてればできてくると思います。

勝本顧問 子ども中心、授業中心になると教職員がまとまるんですよ。

森川先生 さらに一番いいのは、**授業が良くなったら圧倒的に子どもたちの問題行動が減ります**からね。「子どもが落ち着いてすごせる学校になるから、教職員が足並みそろえて授業研究しよう！」なんです。その結果、学力向上もなされてくるんです。

勝本顧問 子どもの可能性は数値化したものだけでは測れないし、子どもによって目標へのたどり着き方も違う。そこに応じた接し方ができていると、子どもの不満足感がなくなるんです。子どもには心の問題がいっぱいありますが、授業に適度な緊張感を持たせることで解決できることがあるんです。

森川先生 子どもがどこで力を使ってるかですね。休み時間にだけ力が使われている学校は荒れるんです。授業で疲れている学校は荒れないんです。授業で頭使って、書いて発表して聞いて、振り返り書いてやっていたら、充実しますからね。そのあと休み時間でも、子どもって元気だからいくらでも遊びますよ。でも、荒れにくいんです。新しいことへの挑戦が一番エネルギーを使うと、いい意味で疲れてますから。要するに、子どもは自分のカラダの細胞変化を促したい存在であり、常に自分を更新しているんです。

勝本顧問 教育を見つめなおす時期かも知れませんが、制度面での改革も、もちろん大切ですが、実は授業の本質に迫ることが最も重要なのかも知れません。

森川先生 話題になっている働き方改革の本当の到達先は、**授業を充実すること**にあると思います。「授業で幸せを享受してますか？」「幸せを享受できる授業の作り方をみんなで話そう」ということが、教育を変えていくと思います。「本当に授業楽しかった！」「教えて！どんな楽しいことがあったの？」「いや実はね」、これが働き方改革ですよ。

——授業づくりへの向き合い方をお聞かせください。

森川先生 「ひとりも取り残さない」を根底に、**クラス全員の子がわかる・できる授業をする**のが授業づくりの本質だと思います。そのためには**教師の日常を変える**ことです。すごい実践をやるわけでも、花火を上げるわけでもない。教科書以外から特別な題材を持ってこなくても要らないと思います。そうではなく、例えば国語で教科書教材を使って、国語的なものの見方・考え方をちゃんと獲得させることが大事だと思います。「スミー」や「大造じいさん」を学ぶのはそのためです。

勝本顧問 「教科書」ではなく、「教科書で」何を教えるかですね。

森川先生 大事にしているのは、**板書、ノート指導、音読指導、読み書きなど日常指導**です。**発問技術**からも目をそらしてはいけません。一方で、今はクリックひとつで誰でも情報を入手できる時代です。得た情報から次の知恵を生み出していき「ゼロ→イチの力」が必要です。知識は子どもがスマホで調べられるので、僕たちは考える価値を提供する問いかけをしないとイケない。子どもたちが自分で考える授業をつくらなければならないんです。「みんな、こんな意見も出てるぞ！」って板書があり、投げかけがあって、子どもたちが、「おー、そうかー！」って考えを突き合わせるために教室がある。キレイで整理された板書だけではなく、考えたかどうかの板書が大事だと思います。

——子どもたちに考えさせるきっかけをつくるのがとても重要だと？

森川先生 シンプルに言うとそこが全てだと思ってます。子どもたちが自分事として考えているか、判断しているか。授業の中に必然として判断シーンがあって、常に個々として思考していることが大事です。みんなが一緒に思考で、何も考えなくても先生がおろしてくれるような授業ではいけないと思います。「あなたの頭で判断したことを語れ！」ということをやっていかないと。でもその時、クラスには30人のいろんな子がいるんです。誰も置いてはダメで、**ひとりひとりが考えられる方法**を教えることが大切です。

勝本顧問 学び方を教えてあげるとのことですね。

森川先生 例えば「気持ちを書け」って言わないで、「どんな顔してるか簡単な絵を描きなさい」って言うと、ニコリした顔を30人が描いても、しゃべる段階でその差異が出るんですよ。でも全員ちゃんと絵は描けるので、ひとりも取り残してないんです。こういう方法を考えるのが教師の仕事で、その間口を広げるのが自己研鑽であり、研究授業であり、授業について議論することです。

勝本顧問 **思考力・判断力・表現力**とが、授業のあちこちで出てきます。教師はそれを拾ってあげないと。

森川先生 大切ですね。例えば国語で気持ちを問うシーンで、僕は「気持ちをハート」を書かせるんですよ。ハートで心を表すので、ちょっと勉強がしんどい子でも何をするかすぐわかります。そして、心の中で考えていることをハートの面積で分けるんです。『お手紙』などの場合、がまくんやかえるくんの心の中を見る時に、「もう手紙もらえないよ」という気持ちの一方で、「もしかしたらもらえるかも知れない」とか。「君がそんな手紙書いてくれたの？」って喜びや、「でも手紙ホントに届くのか」という不安など、心ってひとつじゃないですよ。それを説明するのはとても難しいです。ハイタレントな子は言えますけど、「口では言にくいな」という子もいます。その時、**みんなができる・満足する方法**を考えていく。ハートを書いて、真ん中で線を引いて、右半分は全部「期待」、残りの半分をさらに2つに分けて、「不安」と「ドキドキ感」というふうにしたら言うのがしんどい子も絵で表します。そして、「はい、じゃ今すぐ、iPadで提出しなさい」と言ったら全員提出できます。**全員が参加できるやり方**を見つけていくのが、授業づくりになると思います。



《ニッケ教育研究所顧問》
かつもと たかお
勝本 孝夫 氏
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

勝本顧問 総合的読解力につながりますね。いろんな心の力を駆使して、表現の仕方を考えたり、判断をしたり。その力を子どもたちに発揮させるために、具体的に問いかける。例えば「かさこじぞう」で、「ふぶきの中、おじいさんはどんな顔でかさをかぶせたの？」と。子どもたちは、雪に触って冷たかった時のことと比べながら考えていきます。

森川先生 「気持ちのハート」という学び方を知ると、その授業ではやってないのに「私なりにがまくんとかえるくんの気持ちのハートを書いてみました」という記述が出てくるんです。2年生ですよ。学んだフレームワークを活かしているんです。自分の血肉になってるんですよ。これからもずっと使えるということです。

勝本顧問 **学び方を学ぶと、生き方につながってくる**。だから国語的な学び方、算数、社会の知恵の学び方、そういうところに目を向けることが大事です。

森川先生 やはり根本的には、「ひとりも取り残さない」ということがあって授業の工夫も生まれます。授業の工夫をいくことで授業が深まります。不易と流行の行き来というか、教育の基本に帰れば新しい工夫も出てくるんです。往還があるという感じです。一番の不易である**「どの子も置き去りにしない」「どの子もわかる・できる授業をする」**というのがある限り、最先端の工夫も生まれるという柱が大事です。

勝本顧問 実は、教職員も置き去りにしていないんです。子どもを置き去りにしないことは教職員が成長しないといけない。教職員が成長するというのは、教職員も置き去りにしていないんです。

——最後に、森川先生が今後やりたいと思っていることをお聞かせください。

森川先生 学校の先生になりたいと思っている学生の方に語ることです。子どもの素敵な姿とか、子どもと対峙している僕たちの仕事について語り、夢もリアルもお伝えしたい。「**教育って、夢もあるけど、ここが難しい」「人間が成長する、その瞬間に立ち会える仕事ってなかなかないぞ**」って。仕事に上下はないですけど、人が成長する瞬間に出会えるのが教師ですし、こんなに尊い仕事はありません。だから、「**大変なこともあるよ。でも補って余りあるぐらい夢もロマンもあるから来いよ！**」って伝えたいです。



私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざして、現場ではさまざまな創意工夫が行われています。「私がつくる 子どもの笑顔」では、現職の校長先生に学校づくりの考え方や具体例を紹介していただき、子どもたちを育む学校環境についての意識を深めていきます。
第11回は、大阪市立榎本小学校の山西直樹校長です。

第11回 子どもたちの『生き抜く力』を 育てるために ～ 地域一体となった学校づくり～

《大阪市立榎本小学校》 やまにし なおき 山西 直樹 校長

榎本小学校は今年で創立115年を迎えます。私は教頭で2年、校長として3年榎本小学校で勤めています。毎日子どもたちの笑顔と元気をもらいながら、楽しく学校生活を送っています。



地域に支えられ、地域と一体となって

本校の教育は、時代の流れの中で変わっていく内容もちろんありますが、この十数年大切にしていることがあります。それは、『生き抜く力』を育てるために子どもたちに関わる大人が『寄り添う』こと、そして子どもたちの『自尊心を高める』ことです。その思いを中心にしてカリキュラム

マネジメントを構築しています。地域とともに歩む学校とはよく言われていますが、榎本小学校はまさに学校（教職員）が地域に支えられ、地域と一体となって子どもたちの教育を進めています。



笑顔で「おはよう」、笑顔で「さようなら」

子どもたちの登下校時、私は時間の許す限り玄関に立ってその様子を見守っています。在籍児童は900名あまりと、大阪市内でも有数のマンモス校です。集団で登校する光景は実に壮観で、子どもたちは班長を中心に整列して登校してきます。そして、朝は「おはよう」のあいさつで始まります。笑顔いっぱい元気な登校するたくさんの子どものために、私は毎日元気をもらっています。



また、毎朝の子どもたちの登校を見守るため、榎本地域活動協議会の方が青パトで巡回パトロールをしてくださっています。区役所の青パトが巡回するということはよくありますが、地域の

青パト巡回による見守りはほとんどないと思います。巡回するときには、子どもたちにマイクを通して声掛けもしてくれています。



下校時は、学年によって下校時刻は違いますが、「さようなら」「また明日ね」と言いながら、子どもたちは笑顔で下校しています。その際、学年を問わずたくさんのごもたちと「じゃんけん」をします。1人1回の約束ですが、みんな本気で(!?) 全力で(!?) 「じゃんけん」をします。勝っても負けても笑顔で「さようなら」は、なんだか心穏やかな気持ちにさせてくれます。その時刻になると敬老会の方々や交差点等に立ち、やさしく見守ってくださっています。

子どもたちの学力は教師の指導力

本校の子どもたちは明るく素直です。先生のことが大好きな子どもたちたくさんいます。この、かわいらしく大切な子どもたちの学力をつけるのは私たちの役割です。常々私は、子どもたちの学力を上げるためには教師自身の指導力を向上させることだと先生方に伝えています。とは言ものの、経験年数の浅い若手教員が多数を占める今の状況にあって、それを実現することは容易ではありません。そのため本校では、若手教員の指導力向上を学校の重要課題の一つとして全教職員で共通理解し、まだメンター、メンティーという言葉が十分に広がっていない時代から先がけて取り組んでいます。若手の研修会を『ひかりの会』と名付けて組織化し、そこでの多岐にわたる研修はメンバーによって計画立案されています。中堅教員、ベテラン教員はもちろんのこと、事務職員、事業担当主事、管理作業員

も含めてみんなで関わっています。「継続は力なり」と言葉通り、『ひかりの会』は指導力向上のための大きな柱となっています。



「立ち向かい、乗り越える力」の育成

児童数が多いため、教職員も数多く在籍しています。その教職員すべてが、『「立ち向かい、乗り越える力」を育成する～寄り添い、自尊感情を高める～』という学校目標のもと、それぞれの立場で子どもたちに関わっています。そして学年、学級でも、学校目標に沿った目標を立てています。学力向上に関しては、子どもたちに「わかる喜び」を味わわせるため、まず教師ひとりひとりが指導力を向上することを重視しています。一方で、子どもたちに寄り添い、子どもたちの普段からの様子をしっかりと見ながら声をかけることで、心の変化や体調

の異変にいち早く気づけるように心掛けています。休憩時間には、運動場でたくさんの先生が子どもたちと遊んでいる姿が見られます。転動されてきた教職員の方からよく、「たくさんの先生が運動場に出ていますね」と言われるくらいです。先生方は、遊ぶときにも全力で子どもたちと向き合っています。その積み重ねのおかげで、現在は子どもたちの自尊感情も上昇傾向にあり、『学校が楽しい』と思う子どもたちが増えてきています。



学校の宝『えの森』

大阪市内にある学校としては運動場が広く、子どもたちが伸び伸びと体育の授業を受けたり、休憩時には元気いっぱい遊ぶことができます。その運動場に面して、創立80周年のときに地域の方々に整備していただいた『えの森』があります。子どもたちはいつも『えの森』と言っています。『えの森』



では、今の大阪市内ではなかなか感じるできない四季の移ろいを感じることができます。そのことから、理科や生活科の学習では年間を通じて活用できます。また、図画工作や総合的な学習で活用することもあります。学習以外でも休憩時間になると、子どもたちは虫探しやドングリ拾いなどさまざまな遊びを自分たちで見つけて楽しんでます。『えの森』の良さを言葉だけでは表しきれないので、ご来校の際にはぜひお立ち寄りいただければと思います。なお、本校ホームページのトップ画面に、「えの森の四季」の写真をアップしていますのでご覧ください。

榎本小学校のホームページはこちら！

えの森の四季折々の写真が見られます
<http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=e701570>



おわりに

現在、多くの子どもたちが明るく元気に毎日登校しています。「明るく」「楽しく」「元気よく」を実践している子どもた

ちの姿が何よりです。その子どもたちと、共に学び育ていく教職員集団であり続けたいと思います。